

## 朱鞠内の掘り起こし運動で実践される歴史和解

### —国民国家の周縁における共感の拡げ合い—

Rosa Lee

東京大学 大学院総合文化研究科  
国際社会科学専攻 関連社会科学コース

#### 1. 目的

グローバル化の浸透や少子高齢化などの影響で「多文化共生」が身近な現実になりつつある今日、国民国家の歴史は一つの観点から構築される物語に抑えられなくなった。その結果、複数の歴史が語られるようになった現代社会では、多様な歴史認識を許容できる方法が必要となった。歴史を問い直す実践にひらかれる共生のありようをより正確に同定するためには、歴史和解でつながる社会関係に限らず、それによって絶たれてしまう関係にも目を向けなければならない。こうした問題意識から、本研究では友好的な関係の構築あるいは回復を目指して異なる過去の解釈を話し合う共同作業、すなわち歴史和解に導かれる社会のありようを考察する。

#### 2. 方法

そのために、1976年から今日まで、東アジアの和解を目指して北海道朱鞠内の強制労働の歴史を掘り起こしてきている草の根運動、「朱鞠内運動」に注目して、日本と韓国の各地で多現場エスノグラフィーを実施し、和解のために用いられる諸々の物語と、それらが共有される状況をナラティブ分析で考察した。物語の内容と、そのコミュニケーションが行われる文脈に注目することによって、当事者たちの歴史認識の他にも、彼女・彼らが自分と社会、そしてその社会を共有する他者との関係をどのように認知しているのかを捉えようとした。

#### 3. 結果

朱鞠内運動のなかで、民族や国籍、年齢など、立ち位置の異なる参加者たちは、無名労働者の遺骨に出会うことによって、過去の暴力という<sup>ファクト</sup>事実が、真相を見出せない<sup>リアリティー</sup>現実であることを実感していた。その出会いは個々人の歴史的想像力を刺激し、各々が過去の他者と自分の現在をつなげて<sup>パーソナライズドヒストリー</sup>「個人の歴史」を構築するように促す。なお、朱鞠内の過去に関しては、解釈の幅を制限する正史が存在しないがゆえに、<sup>パーソナライズドヒストリー</sup>「個人の歴史」の序列関係が成立しない。それにより、参加者たちは他者の<sup>パーソナライズドヒストリー</sup>「個人の歴史」を否定せずにお互いの物語を共有する相互開示の過程を通して、自分の日常生活では出会えない他者との関係性を紡ぎ合っていた。

#### 4. 結論

多くの参加者たちにとって、朱鞠内のような日常と非日常が交差する空間で<sup>パーソナライズドヒストリー</sup>「個人の歴史」を構築する経験は、東アジアの歴史における自分の位置づけを捉えなおすことによって、自分の世界を変容させる契機となっている。正史になることのできなかつた過去の真相を語るだけでは主流の歴史を変えられないが、様々な個人をつなげて周縁から社会を捉え直すことは不可能ではない。